

私の勤務する出版社に若い佐々木という社員がいた。文章の腕はいいが、変人めいたところがあり担当の作家諸氏の受けはよくなかった。以前から小説の新人賞に投稿していたが、運がないのか通ったことがない。

そんな彼が、帰りぎわに、私のところへ原稿を持ってきた。

「デスク、今度書いたのは久々の自信作なんです。感想を聞かせてもらえませんか？」

『鏡』という数十枚の短編だった。仕事から彼の書く原稿はいつも読むが、彼の小説を読むのは初めてだった。気軽に受け取り、目を通して驚いた。構想は雄大で、文体は香気にあふれ、行間からは深い思想がにじみ出ている。

「素晴らしい。直すところはないよ。これなら絶対に賞を取れる！」

「そうでしょうか。もし、これが通らなければ筆を断とうかと考えていたところでした」

そう言う佐々木の顔は見たこともないほど晴れ晴れとして、うれしそうだった。

半年後、佐々木は青い顔をして入社してきた。

「どうした？」

「デスク、だめでした……」

「だめって、何が？」

「例の小説です」

「えっ、何だって？」

私は信じられなかった。その時何といってなぐさめたか覚えていない。

その頃、私は実家から故郷へ戻ってこないかと誘われていた。実家は地元では多少名の知れた学習塾を経営していたが、このところ父の体調が思わしくなく、それを私につがせたいと考えていたようだ。私も出版不況のあおりで転職を考え始めていたので、渡りに舟とばかりにこの話に乗った。

あれ以来、佐々木の方も仕事を休みがちで、その顔色はますます悪くなっていた。

「おい、だいじょうぶか？」

「デスク、ぼく、仕事を辞めさせてもらおうかと思うんです」

「な、何？ 辞めてどうするんだ？」

「……しばらく休養して、のんびり田舎暮らしでもしようかと」

「そうか。実は私も田舎の家の学習塾を継ぐことになったんだよ。国語の先生をやってみる気はないか？ 子供たちと接していると、胸のつかえも取れる。英気を養うにはピッタリだぞ」

「ぼくは体をこわしてからですから、足手まといになるだけですよ」

「そんなことはないさ。好きな時に授業してくれたらいい。何しろお前の国語力は別格だ。きつと子供らにとって大きなインパクトになる」

「そう言ってもらおうと光栄です。いつもデスクには励まされてばかりです。体調がよくなれば、お力になれるかもしれません」

「そうか。期待してるぞ！」

それから三、四ヶ月がすぎ、世間がにわかには春めいてきた頃、私は実家の学習塾で春期講習の準備に余念がなかった。

「塾長、佐々木駿という方がご面会に来られていますけど、どうされますか？」

受付嬢からそう聞いたとき、私ははっとした。

「至急、応接室へ通してくれ」

久しぶりに会った佐々木は病み上がりのせいだろう、顔色は悪いが、その表情はにこやかだった。

私は早速、彼に近辺進学校の国語入試問題を研究してもらおう一方、中学受験国語選抜クラスの特別講師として教壇に立つてもらった。

「脱センターの傾向だろうか、最近の中学入試は自由な記述のウェイトが高まってね」

「望むところですよ。本来国語はそういうものです」
見る見るうちに、生徒たちの国語の成績は向上し、佐々木の名は近隣生徒やその親たちの間に知れわたった。佐々木の授業を受けたばかりに、他塾をやめて、私の塾へ入る生徒も相ついでだ。

ところで、私には悩みがあった。小六の息子がいるのだが、全く勉強しない。読書好きで、ひそかに小説もどきの文章を書いたりしているらしいのだが、受験勉強をけげらいしている。

「何とかならないものかな？」

「そうですね……じゃ、ぼくに話をさせてみてください」

驚いたことに、翔は佐々木と話をした翌日から、猛然と勉強を開始した。そして翌春、地域二番目の進学校に合格した。

佐々木は、もし翔が受験に成功したら、小説の書き方を指導しようと言ったらしい。その言葉通り、翔が中学に入ると、時々うちへ来ては彼の原稿に手を入れ、あれこれと話を交わしていた。一年後の夏休みの午後、翔がハガキを手にドタドタと階段を駆け降りてくるのが聞こえた。

「父さん、母さん、ぼく、やったよ！」

話を聞くと、中高生を対象とする小説コンクールに一位入選したのだという。驚いた私は、佐々木に連絡し、授賞式にいつしよに行ってくれと声をかけた。

彼が気の毒になった私は、息子の世話をしてくれるのはうれしいが、自身でももう一度賞に応募してはどうかとも言ってみてみた。

「いいんです。ぼくの作品はデスクが正当に評価してくださいました。翔君の入賞は、ぼくに才能があることの証明でもありましたから」

授賞式は皇居近くのホテルの最上階で行われた。出版社の社長をはじめ、名だたる作家先生数人が列席し、式は順調に進んでいった。最後にあいさつに立った老作家が言った。

「昨今の出版界のもうけ主義の中で、今回の翔君のような清々しい作品を読むと、本当に反省させられます……」

私が隣にいる佐々木を振り返ると、彼はうつすらと笑いを浮かべ、その姿は次第に薄くなり、見るまに消えていった。

「佐々木、おい、佐々木！」

あわてた私は探し回ったが、彼はもうどこにも見当たらなかった。後日、彼の親もとに連絡をとると、彼は二年前、出版社を退社してまもなく、病気のために亡くなっていたとわかった。